

# 個人化される「方法としてのアジア」： シンガポールの日本人、 そしてシンガポール人は「アジア人」か

加 藤 恵津子

はじめに

武田清子とかねてより交流のあった中国研究者・竹内好が、国際基督教大学アジア文化研究委員会（当時）にて「方法としてのアジア」と題する講演（1961）を行ってから、半世紀以上が過ぎた<sup>1)</sup>。この講演には、日本批判と西欧批判の二つの側面があり、大部分は前者にあてられている。

太平洋戦争の反省期にあつて、当時の竹内は、日本が「連帯感のゆがめられた表現」<sup>2)</sup>で近隣アジア諸国を侵略したこと、「アジアを支配したい野心だけが先行して、そのためにアジアを知る必要があるのに、かえって知ることをみずから拒んだ」<sup>3)</sup>ことを各所で批判・反省していた。上述の講演でも、本来は近隣アジア諸国に学ぶべきもの、敬意を払うべきものがあつたにも関わらず、日本はあまりにもそれらに無関心であり、それどころか近隣を侵略の対象としてしか見てこなかったところに問題点を指摘している。

「方法としてのアジア」という言い回しは、西欧批判に話に移った終盤に登場する。「自由」や「平等」という文化価値は、西欧から、武力を伴って、植民地主義に支えられて浸透してきたので「全人類的に貫徹しない」のであって、この「ヨーロッパの力ではいかんともしがたい限界」に対し「東洋の力が西洋の産み出した普遍的な価値観をより高めるために西洋を変革する」、言い換えると「文化的な巻き返し」が必要だと竹内は言う<sup>4)</sup>。さらにいわく、

その巻き返す時に、自分の中に独自なものがなければならない。それは何かというと、おそらくそういうものが実体としてあるとは思わない。しかし方法としては、つまり主体形成の過程としては、ありうるのではないかと思ったので、「方法としてのアジア」という題をつけたわけですが、それを明確に規定することは私にもできないのです<sup>5)</sup>。

ここで唐突に講演は終わる。「西洋」と「東洋」の二項対立、「アジア」を「東洋」と同義で使うことへの説明のなさ、「アジア（東洋）」の範疇の曖昧さなどに、今日読むと、むしろ戦中の大東亜共栄圏の思想に通じる危うさすら感じられる。しかし「方法としてのアジア」という魅惑的なフレーズや、アジアを実体としてではなく「主体形成の過程として」捉えるという、ポストモダニズムを先取りするような発想は、近年、海外におけるアジアニス

ト研究ないしアジアニズム研究（後述）において注目されている。

本稿では、二つの意味で「方法としてのアジア」に着目する。一つには、ある人が「アジア（人）」という語を使って自己や環境について語る時、それがその人にどのような効果を及ぼすのかという、自己認識の方法としてのアジアへの注目である。二つ目には、研究者（私）が、「アジア（人）」を、なんらかの部分的・流動的な実体を伴いながらも、あくまでも言説上の概念として捉えることによって、アジア研究でなく、アジアニズム研究を推し進めたいという、研究方法論上からの注目である。

本稿ではシンガポールをフィールドとし、まず、そこに暮らす20代から40代の日本人一時就労者40名の人生の語りの中に、どのように「アジア（人）」という語が現れるかを見る。そうすることで、個人レベルにおけるアジアニズムが、自己、過去、そして今いる場所について自分を納得させる認識を生み出すために、どのような役割を果たしているかを考察する。次に、同年代のシンガポール人5名に自己観、自国観（の変化）について語ってもらう際、「アジア」や「アジア人」という概念がどのような意義を持つ（または持たない）かを考察し、日本人インタビュー어의語りと比較する。本文中、すべての人名は仮名である。

なお本研究は、より大きなプロジェクトの一部である。筆者は、日本での職を辞して、単身で海外渡航する「若者」（年齢に関わらず「人生の準備中」という認識を持つ人）の自己観、世界観、仕事観についての研究を2001年より行ってきた。バンクーバー（カナダ）、シドニー（オーストラリア）での参与観察とインタビューの後、2017年よりシンガポールにて、4回にわたる調査を行った。カナダとオーストラリアでは英語学習初級者やワーキングホリデー<sup>6</sup>が主なインタビューーだったが、シンガポールではそのような人は少数派で、ほとんどの単身渡航者が就労者である。シンガポールを三つ目のフィールドに選んだ理由は、最初の二つのフィールドで、現地で就職を希望するも仕事が見つからない人に数多く出会い、そのうち特にオーストラリアで「仕事がないからシンガポールに行くかも」と語る人が散見されたためである。観光や語学以外に主要産業がなく、外国人就労者への規制が年々厳しくなるバンクーバーやシドニーに対し、「アジア経済のハブ」かつ英語圏のシンガポールは、前者で人生を展開させられなかった日本人が流れ着きやすい先と見えたのである。

このように本研究には、英語圏欧米と英語圏アジア（シンガポール）での経験の違いをインタビューーに語ってもらうというアジェンダがあったため、インタビューー募集の際、当初は英語圏欧米での生活経験者を歓迎した。しかし中国語圏での生活経験者も応募してきたため、より幅広い海外経験者を募集するよう変えた。

シンガポールで「アジア」を論じることには、もう一つ理由がある。シンガポールの国策において「アジア」は常にキーワードだからである。中華系（最大多数派、6割）、マレー系、インド系から成る多民族国家であること、欧米からの投資に依存しつつも文化的には欧米に対抗したいことなどから、シンガポール政府は、Asian values、Asian ways<sup>7</sup>等と呼ばれ

るイデオロギー政策を要所々々で打ち出してきた。2018年7月に私が訪れた時も、国立図書館では Look Asia（近隣アジア諸国でのビジネスを促すキャンペーン）の旗や特設コーナーが目をつけた。このような環境は、一時滞在の日本人のアジア観にも影響を及ぼしているのではないかと。いっぽう、物心ついた時から「アジア（人）」としての自覚を促されているシンガポール人の自己観・自国観に、政府キャンペーンは狙い通りの効果を及ぼしているのだろうか。またその効果は、日本人一時滞在者におけるものと同じだろうか。

以上を論じるにあたり、本稿ではまず、近年のアジアニズム研究を提示し、竹内の議論とのつながりと、それらの意義について考察する。次に、日本人およびシンガポール人インタビューの、自己やシンガポールという場所についての語りを記述し、それらにおいて「アジア（人）」概念が果たす役割を比較する。この時、多くの日本人インタビューの語りにおいて「アジア（人）」は重要かつ肯定的なニュアンスを持つのに対し、シンガポール人インタビューの間では、「アジア（人）」はほとんど意味をなさないことを示したい。最後に、なぜそのような違いが二者の間で見られるのか、そして日本人一時就労者の口にはぼる一見アジア主義的な語りや、必ずしも竹内の唱えるような国家間の（その意味で国家主義的な）連帯を志向するものではないことを明らかにしたい。

## 1. アジアニズム（ズ）とグローバル化・個人化

「アジア」が西洋由来の概念であり、ヨーロッパの植民地主義的・帝国主義的関心と結びついていることは、すでに多くの研究が指摘している<sup>8)</sup>。そのような批判精神を前面に出すにせよ出さないにせよ、「アジア」と呼ばれる地域のどこかを実証主義的に研究する立場がアジア研究 (Asian studies) ならば、「アジア」を一つの言説とみなし、その言説の用いられ方を批判的に研究したり、戦略としての「アジア」概念の使い途を研究したりすることは、アジアニスト研究 (Asianist studies)<sup>9)</sup> またはアジアニズム研究 (Asianism studies) と呼んで区別するべきだろう。

台湾のポストコロニアル知識人 Kuan-Hsing Chen は、まさに *Asia as Method* (2010) と題する著作で竹内を引きながら、アメリカ合衆国によるアジアの分断を糾弾し、概念としてのアジアを戦略的に用いることを提唱する。

アジアという概念を、想像上の定点として使うならば、アジアの諸社会は互いの参照点となることができるだろう。それによって自己理解は変革され、主体的に再建されるだろう。…また同時に、方法としてのアジアを公式化することは、脱植民地、脱帝国主義、脱冷戦という三つ巴の問題の解決を促す試みでもあるのだ<sup>10)</sup>。

同様の立場は、Frey and Spakowski による編著 (2016) *Asianisms* にも見られる（中でも Weber 論文は、竹内、Chen の両方を引用しつつ「方法としてのアジア」について集中的に

論じている)。Freyらは複数形のAsianismsという、これもまた魅惑的なフレーズを提唱する。その定義は「アジアという言説上の構築物と、それにまつわる政治的、文化的、社会的実践」であり、「アジアの異なる地域や国の間の共通性、または共通の関心を強調する、あらゆる概念、想像、プロセスの総称」だという<sup>11)</sup>。また複数形にするのは、アジア内外におけるアジアに対する考え方の複数性、多様性、非一貫性を表すためであり、この点でアジアニズム(ズ)は、「汎アジア主義(pan-Asianism)」に関連しつつもその先を行くという<sup>12)</sup>。Freyらは、実体としてのアジアに関心を置かないという点で竹内を継承している。また、アジアという地域区分や名称そのものに欧米帝国主義を見ている点<sup>13)</sup>で、Chenの脱帝国主義的な姿勢と相通じる。

ところで、竹内、Chen、Frey and Spakowskiらは、アジア内での相互の交流・接触・参照という時、国または地域単位を想定しているように見える。Chenが「アジアの他の地域を参照すれば、自己をよりよく知ることができる」という時の「自己(self)」とは、国なり地域なりといった社会単位のこと、個人という意味ではなさそうである。しかし、個人はつねに自分の生まれた国や地域に貼りついているわけではない。高度な技能や専門性を持つ人材に対しては、今やグローバルな争奪戦が行われているし、アジアの貧しい国や地域の人でさえ(いや、貧しい国や地域の人ほど)国境を超えて移動している。加えて、それほど高度技能人材というわけでもなく、貧困国出身というわけでもない多数の人々——私の日本人インタビューイヤーがそれである——も、語学などの中短期滞在目的で訪れた先で、就労や結婚をきっかけに長期滞在したり、永住したり、あるいは人生の転機を求めて国から国へと移動したりすることも珍しくない。

そうであればアジアニズム(ズ)も、人間のふるまいの個人化、グローバル化を前提として——「移動する個人」を単位として——論じる必要もあるだろう。

連帯感と、覇権にまどわされない交わりに深く関わるために「アジアに入る(入亜)」ならば、それは(中略)「知的な実験」であるだけでなく、自分自身や、隣人や、もっとも大きな意味での社会——近所付きあいというマイクロレベルから、グローバル社会まで——への向き合い方を変えることになる<sup>14)</sup>。

そうであれば、「マイクロレベル」の最小単位である個人が、「アジアに入る」ことによってどのように変わるかを観察することも、今日のアジアニズム(ズ)研究の一環として意義があろう。

## 2. インタビューー概要

### 2.1. 日本人一時就労者

本研究のインタビューのメイン対象者は、いわゆる現地採用の日本人である。正確には、

20～40代の、シンガポールに合計1年以上住んでいる、シンガポールで働く目的または希望を持って、単身で入国した人々（駐在員は除く）である。以下はインタビュー어의背景の概要である。

- ・女性 24名 > 男性 16名（計40名）
- ・年齢層（多い順）：30～34歳（12名）> 35～39歳（10名）> 40～44歳（8名）  
> 25～29歳（5名）> 45～49歳（3名）> 24歳以下（2名）
- ・平均年齢：34歳
- ・現勤務先（多い順）：日系企業（23名）>シンガポール系（5名）  
>米系（3名）>欧系（3名）>主婦（3名）  
>自営（2名）>求職中（1名）

また前述の通り、この調査はあえて海外経験のある人を歓迎または募集している。インタビューーたちの、シンガポール以前に滞在したことのある国（自ら選んだ渡航先に限る）は、以下の通りである。

渡航経験国（多い順、複数回答可）：

- アメリカ合衆国（11名）>オーストラリア（9名）
- >イギリス（7名）>カナダ（5名）
- >シンガポール（5名）>なし（4名）
- >中国、香港（各3名）
- >台湾、ニュージーランド（各2名）

オーストラリアが上位に入るのは、シンガポールとの地理的な近さから理解できるとして、目を引くのはアメリカ合衆国の存在感である。日本人にとってアメリカがいかに「海外」のイメージを独占し、「海外に行きたい」人に選ばれやすいかがわかる。また、中国語圏の滞在経験者が8名いるが、英語圏欧米の経験者34人に比べれば少ない。

なお、シンガポールの労働力の流動性の高さを反映して、ほとんどのインタビュー어가何度か転職している。また日系・現地・外資系企業の間でさかんに吸収合併があるため、ある会社が「何系か」を正確に記述するのは困難である。

職場環境は、日本人上司（駐在員）や同僚とともに、ほぼ日本語だけで働くケースもあるが、多くはシンガポール人や、近隣アジア諸国（マレーシア、ベトナム、ミャンマー等）や欧米からの一時就労者とともに、時に英語でやりとりしながら、日本語で日本人顧客のために働く。一方、英語のみを使って仕事をしているインタビュー어はいなかった。そもそもシンガポールで日本人が現地採用されるのは、日本語ができる働き手への需要が高いためであ

る。

## 2.2. シンガポール人インタビュー

日本人インタビューとの比較のため、海外経験のある同年代のシンガポール人5名にもインタビューを行った。対象者は、シンガポール国立大学 (NUS) 日本研究学科出身の知人 Minna を中心に集めたため、5名とも同大学同学科に所属した (している) 経歴がある。これは偏りと言えるが、日本とシンガポールを比較してもらったり、シンガポール人の日本観を知ったりする上では有益だった。インタビューは主に英語で行った。また5人とも中華系であるが、これはシンガポール、特に NUS のような国内トップ大学では、中華系家庭出身の学生が多数を占めることを反映している。ただし、5人の中にも微妙な経済格差や学歴差がある。以下は5人の背景の概要である。

名前	年	性	現在の仕事	高校	学歴	海外経験	備考
Jade	24	M	学部4年生	普通校	未定	日本 (短期) UK (短期)	大学入学前に 兵役
Minna	35	W	大学講師	普通校	博士	日本 (短期) AUS (博士)	母国の大学に 就職
Chris	34	M	大学講師	普通校	博士	日本 (短期) US (博士)	US の大学に 就職予定
Sunny	39	W	大学講師	高等専門学校	博士	AUS (博士) 香港 (調査) 台湾 (調査)	働きながら 学士・修士 取得
Karen	29	W	米系 IT 企業	高等専門学校	学士	日本 (短期) NZ (ワーホリ)	大卒後に 動物園勤務

UK：イギリス、AUS：オーストラリア、US：アメリカ、NZ：ニュージーランド

5人のうち、Sunny と Karen は高等専門学校 (polytechnic) を終えてから大学に進学している。Karen は卒業後、すぐに就職し、その後ワーキングホリデーでニュージーランドに渡航、帰国直後にまた就職している。Sunny は金融会社で働きながらパートタイム学生として学士と修士課程に通っており、自分は「特権層ではない」と言う。その後、社会人向けの奨学金を得てオーストラリアに留学、帰国後は大学講師になった。Minna と Chris は普通高校から大学に進学し、各々オーストラリア、アメリカで博士号を取得、いずれも大学講師となった。

シンガポール人に対するインタビュー内容は、厳密には、日本人に対して行ったものと同じではない。日本人に対しては、これまでの海外経験でのポジティブ・ネガティブ体験を幅広く聞いたうえで、シンガポールに来たことをどう捉えているか、自分は変わったと思うか、「アジア」について思うことはあるかを聞いて行った。シンガポール人に対しては、両

親の民族的出自、学校や家庭で「中国人であること」「シンガポール人であること」「アジア人であること」について教えられたことがあるか、海外に出た時にどのような体験をし、「中国人」「シンガポール人」「アジア人」としてのどのような自己認識を持ったかを質問した。

### 3. 日本人一時就労者の「アジア」

#### 3.1. 初めて出会う「アジア」

すでに述べたようにシンガポールは、英語圏欧米に関心を持ちながらそこでの就職が叶わない日本人を多く吸い寄せる。このためほとんどのインタビューイにとって、シンガポール行きは次善の策であり、予想外である。インターネットや人材エージェント、人脈を通して職を探すうちに「流れ流れて」「あれよあれよと」「とんとん拍子で」シンガポール行きが決まったと語る人、面接からわずか数週間から1か月後に現地入りしたという人も珍しくない。

こうして、熟慮する間もなくシンガポールに渡航する日本人一時就労者、特に英語圏欧米に滞在したことのある人々にとって、シンガポールに来ることは、アジアに戻ってくることを意味するのではない。それはアジアとの「初めての出会い」である。

大学4年間をアメリカで過ごし、日本で就職したが「[海外に]行きたいな、どこ行こう」と考えた時、兄にシンガポールで働くことを勧められた由梨さん(39)は「驚いた。私の中で、アジアはまったくリストに入らなかった」。カナダに続き、オーストラリアにワーキングホリデーで滞在中、職探しをする中で、知り合いの人材エージェントからシンガポールを勧められた照正さん(41)は「最初、え、それ英語圏なんですかって言っちゃった。二番目には、アジアにはまったく興味がなかった」。

剛士さん(25)は、高校時代にアメリカに一年留学し、帰国してアメリカの大学の日本校に通い、日本の大手メーカーに就職した。すると、社内ルールにより「若すぎて駐在員になれない」ため、すぐにシンガポールでの現地採用を命じられた。「今までアメリカに目を向けていたのに、シンガポールは意外でしたか」と尋ねると、

はい。アジアには行ったことがなくて、シンガポールが初めてのアジアの国だったんですけど、どういう国か想像もつかなかったし、どこにあるかも知らなくて、自分で調べました。恥ずかしいことに(アジアを)全然知らなかったので、「自分が想像していたアジアより発展している国なんだな」と。

これらはほんの数例だが、共通しているのは、「シンガポール」について話すことを求められているのに、途中から「アジア」という語で言い換えていること、そして「アジアは初めて」と語っていることである。厳密には、日本で生まれ育った人が「アジアに行ったがこ

とがない」と言うのはおかしい。よってこの「アジア」は、日本を含む地理的区分とは別物である。剛士さんの場合は以下の通りである。

筆者：想像していたアジアって、どういうアジアだったんですか。

剛士：こういうビル街が全然なくて、小さい2、3階建ての建物が並んでいて（略）、  
「今から発展するんだぞ」という勢いのあるイメージ。外に出たらいっぱい自転車が走っていて。今思うと、たぶんタイのイメージだったかもしれない。スーツ着て歩いている人がいないとか。

興味深いのは、剛士さんの当初の「アジア」イメージが、東南アジア、かつ非都市部に限定されていることである。この背景には、1990年代以降の日本の「アジア」ブームがある。中谷は、この時代の女性誌において、アジアではなく「アジア」雑貨という言葉が頻用されるようになったこと、「アジア雑貨」が、東南アジアを中心とする広範囲地域の手工芸品などを指すことを指摘しつつ、「アジア」が含意するものは一般的な地理的区分ではなく、「ノスタルジアとエキゾティシズムが並列しつつ混合しているという矛盾したまなざし」であると言う<sup>15)</sup>。素朴で未開発だがカラフルでエネルギッシュという、見下しとも称揚ともつかない「アジア（ン）＝東南アジア」のイメージは、商業主義やメディアに乗って、いまや日本社会に浸透している。剛士さんがいつの間にか抱いていた「アジア」イメージもおそらく、日本のテレビ局が「アジアふれあいの旅」といった番組で好んで映す映像、あるいは観光産業が「アジア」として好んで使う視覚イメージから来ているのだろう。

しかし、東京23区ほどの広さの国土に、1972年より「グローバル・シティ」の名を政府が掲げ、計画的に築き上げてきた都市国家は<sup>16)</sup>、剛士さんが「ニューヨークと変わらない」と言う高層ビル群、海外ブランド店がどこまでも続くショッピングモール、罰金制度による清潔な景観、熱帯を感じさせない集中冷房システムなどで、日本人の「アジア」イメージを裏切る。「学生時代にタイや香港に旅行に行ったので、（シンガポールは）この二つを混ぜたみたいな感じかな」と思っていた美樹さん(29)いわく、「けっこう衝撃を受けた。想像以上に発展していて、きれい」。

いっぽう、初めから「きれい」な都市生活をイメージして来る人もいる。特にマリーナ・ベイ・サンズ（三本の高層ビルの上にサーフィン型のプールが横たわる高級ホテル）を中心とするマリーナ・エリアのイメージは、日本では2011年のテレビコマーシャルの影響もあり強力である。また香奈子さん(30)は、シンガポール旅行中に「安全、きれい」「タイやマレーシアに比べて安心」と感じ、来てからも「わりとイメージ通り」と言う。このように「他のアジアとは違う」先進都市国家シンガポールに、出会うというより再会する人もいる。



### 3.2. 「アジア（人）の英語」の発見

シンガポールで暮らしていく中で、日本人一時就労者は「アジア」を、さらにどのようなものとして見出していくのだろうか。私のインタビューの大多数は、自分が今「アジア」にいること、自分を「アジア人」と見ることに、非常に肯定的なニュアンスを込める。これは特に、英語圏欧米を経験した人に顕著である。たとえばオーストリア、カナダに語学留学し、ニュージーランドで一年間働いた経験のある千尋さん(39)いわく、

筆者：アジアについて考えることって、ありますか。

千尋：同じような見た目をしているので、溶け込みやすいですね。明らかに、ヨーロッパに行った時に「アジア人」って言われるよりも。豆腐、醤油みたいなものがどこのアジアの国に行ってもあるし。(中略)

筆者：日本に帰って就活するなら、自分のウリは何だと思いますか。

千尋：(中略) 中途半端に英語と日本語ができること。シンガポール人は、インド系、フランス系とかいろんな人の英語を聞いていますよね。(中略) アメリカンの英語の方が聞き取りにくいし、アジア人の英語の方が聞き取りやすいですね。

千尋さんだけではない。「アジア」について思うことを自由に話してもらう時、周囲の人との外見の類似、食の類似、そして「アジア（人）の英語」が、多くの人が感慨を込めて語る三大ポイントなのである。このうち特に興味深いのが「アジア（人）の英語」である。

「アジアの英語なら、緊張はないですね。逆に、アメリカに行って夫の親戚と話す時や、イギリス人の英語が聞き取れなくて緊張する」(亜希実さん、32)。「Singlish (シンガポール英語)<sup>17)</sup>、Hinglish (インド英語) の壁はあるけど、東南アジアの英語は、欧米の英語よりわかりやすい。文法よりも伝えようとする」(英輔さん、42)。「Singlish は母音を発音してくれる。アメリカからの電話を [仕事で] 時々取るけど、子音だけなのでわからない。アメリカ英語は日本人にとって一番難しいと思う」(行弘さん、40)。

多くの人が異口同音に述べる「アジア（人）の英語」は、文法や語彙にとらわれないコミュニケーション志向と、聞き取りやすさに特徴があるとされ、特に「アメリカ（人の）英語」と鋭く対比される。これらの語りが炙りだしているのは、アメリカに憧れアメリカに渡った人も含めて、彼ら・彼女らが、英語圏欧米の英語に実は習熟することができず、劣等感に苛まれていたという事実である。

これに対し、欧米の方が少数派であるシンガポールで、多様な「アジア人」たちが母語の訛りもあらわに、くずれた文法と限られた語彙で堂々と「英語」を使い、理解し合い、日常を成り立たせているさまは、日本人一時滞在者を驚かせる。自分もここに加わればよいのだ、という新たな発見は、外見や食にけると同様、等身大の自分を受け止めさせ、「自分もアジア人なんだ、アジア人でいいんだ」という自己肯定感を生む。だからこそ、インタビ

ユイーの多くが「アジア（人）の英語」を、感慨を持って語るのである。

### 3.3. 欧米との対比：自己の回復の場としてのアジア

前項で述べたように、シンガポールは、日本人一時就労者たちに「欧米の英語」が唯一ではなかったのだという、相対的な視点を与える。このような相対化は言語面だけで起こるのではない。自分がいかに西洋ないし欧米（特にアメリカ）中心主義であったかに気づかされるという人は多い。

アメリカ留学後、アメリカの大学の日本校で経営学を専攻した剛土さん（前出）は、大学で学んだようなビジネスシーンは、シンガポールには当てはまらないと感じると言う。「アメリカではほんとにドライに考えることが多いけど、こっち来て、それは必ずしも正解ではないことがわかって」。実際には「日本的な、相手を気にするとか関係性を大事にする部分」や「アジア人なので、アジア人的心構えがあったり」。この発見は、彼自身のアイデンティティの発見にもつながっていく。いわく、

今までアメリカ（に触れること）が多かった中に、アジアのどっぴりした文化が入って来たので、やっぱり自分はアジア人なんだなと。今まで、日本人かアメリカ人かしかなかったけど、自分のアイデンティティみたいなものですかね、シンガポールのいいところも学べたので、自分のアイデンティティに取り込んだらいいんじゃないかなと。

さらには、差別されない環境に身を置いて初めて、かつての自分がいかに差別され、傷つけられてきたかに気づく人も多い。実際、アメリカやイギリスでの生活の経験者で、差別があったと口にしないインタビューの方が珍しい。康志さん(38)は日本で、アメリカ系企業3社で働いた後、アメリカ系大手IT企業のシンガポール店（日本を含むアジアの統括拠点）に移った。かつて社内制度でアメリカに3か月留学したことがあり、その後、アメリカへの異動を何度も申請したが落とされ続けた。しかし「海外に出たい」と訴え続けたところ、「たまたま」シンガポールにポジションがあり、渡航につながった。期せずして出会ったシンガポールだが、

日本の外で、もっとも日本人がなじめる国じゃないかな。（中略）多様性、ダイバーシティがあっても、互いに（どちらか一方に）合わせる必要がない。その点、アメリカやオーストラリアはそうはいかない。アジアに対するなのか、英語がしゃべれない人に対するのかはわからないけど、差別がある。

彼は、留学時代に知り合ったアメリカ人にその後連絡しても疎遠にされたことから、自分のコミュニケーション力の無さを実感したという。いっぽう現在の職場では、2割がシンガ

ポール人、残りが外国人という環境で、欧米系の人々も含め、互いが互いを聞こうとしていると言いき、これは「アメリカに行ったときはまったくなかった。『俺に合わせろ』だった」と振り返る。

亜希実さん（前出）は、子供時代に親の駐在で世界5カ国に滞在し、イギリスに暮らしたこともあるが、英語は得意ではないというコンプレックスがあった。シンガポールに来てからは日系、オランダ系、カナダ系の3社で働いたが、うちカナダ系電信電話会社での仕事は特につらかったという。

北米のお客さんを英語でサポートするのがつらかったですね。北米では、かなり差別があると思う。アメリカでも、マリアとかフェルナンデスとかいう名前のヒスパニック系のお客さんからは、私の英語への文句や、理不尽な要求はなかったです。でもジョンみたいな（ヨーロッパ系の）名前のお客さんからは、よく文句を言われましたね。私の名前を言うと「お前はインド人か」と言われたこともあるし。アジア人同士では、こんなことは皆無。

日本人と台湾人の両親の元に生まれ、家族でシンガポールに移住し、シンガポールで育った朱音さん（30歳）いわく、

アジアって、私たち黄色人種の代表の地域でもあるので、そこでお互い助け合いながら、白人にいじめられるけど、自分と同じ皮膚の人だからこそ、（一緒に）前に進めるのはあるんじゃないかな。[筆者：安心感がある？] 多少ありますね。やっぱり金髪の中で一人だけ黒髪っていうのも（笑）。

実際には、朱音さんはシンガポールの日本人学校で「雑種」と呼ばれていじめに遭い、後に留学した日本の大学でも一部の学生から「異物扱い」された経験を持つ。いっぽう、日本人学校でのいじめから逃れるために転校したシンガポールのインターナショナルスクールでは、金髪の子供たちに囲まれながらも、いじめは一切経験しなかったという。にもかかわらず、彼女が語る「ドライで冷たい欧米人」対「助け合うアジア人」の対比は、日本人インタビューたちの語りと似ている。これは彼女の現実認識が歪んでいるというよりも、アジア内で結婚・移住した両親の姿から、あるいは英語圏と化したシンガポールにおける、言語や外見に根ざしたアイデンティティへの渴望から、実体としての「アジア」を擁護している結果ではないだろうか。

まとめるならば、様々な意味で「日本人」を自認するインタビューたちにとって、シンガポールは欧米と明確に対峙する「アジア」であり、欧米に代わるオルタナティブでもある。それはまた、ありのままの自己——英語圏欧米の人々とは異なる外見を持ち、異なる英

語を話す——を受容する場であり、傷ついた自己を回復させる治療的な場だとさえ言える。

#### 4. シンガポール人の「アジア」

##### 4.1. 無標の「アジア」

日本人インタビューたちの語りに対し、シンガポール人インタビューたちの語りはきわめて異なる。第一の違いは、彼ら・彼女らにとって「アジア」はほとんど意味をなさないということである。英語圏欧米にいた時も、シンガポールに帰国した後も、「アジア人」としてのアイデンティティを強めたとか（再）発見したと語る人はいない。ただし、留学先で初めて「アジア人」としてラベリングされた人と語る人はいる。さらに、欧米に対抗するオルタナティヴとしての日本に期待を持つ人もいる。

まず、彼ら・彼女らにとって「アジア」という概念がいかに関心と無縁で、無標であるかについて、具体的に見てみたい。「外から来た人はシンガポールを汎アジア的な国だと思うでしょうけれど、あなたは自分をアジア人として意識しますか」という問いに対し、大学生のJadeは「普通は、別に意識しません。人種間の結婚も珍しくないし」と言う。イギリスに交換留学していた時も、黒髪の学生は自分一人だったにも関わらず「あまり自分がアジア人だと感じなかった」。

大学講師のMinnaは、西欧中心主義的な自分の学問分野において、「アジア人アイデンティティ」は対抗としての意味をなすと言う。いっぽう個人的なアイデンティティについては、

Minna：アジア人というより、シンガポリアン、チャイニーズ、または日本文化やオーストラリア文化に影響を受けたヒト。私はハイブリッド。

筆者：「アジア人であること」は、あなたにはあまり意味はない？なぜ？

Minna：「アジア人」ってあまりにも抽象的。アジア人って何？シンガポール人は気さくでフレンドリー。日本人は礼儀正しくて、年配者に敬意を払って、他人にメイワク（ここだけ日本語）をかけない。オーストラリア人はのんびり、っていう方が具体的。

筆者：「東」とか「東南」とか付けても、あまり意味はない？

Minna：ASEANはあるけど、シンガポール人は「私たちはあの人たちとは別。私たちは日本とかニューヨーク」と思ってる。「中国大陸の中国人とは違う」とも。シンガポールはあまりアジアじゃない (Singapore is not quite Asian)。

逆説的なことに、シンガポール政府が絶えず「アジア」を強調しているにもかかわらず、あまりに多様なアジア系の人々が狭い国土に溢れ、かつ「アジア」を標榜する言説が溢れているがゆえに、若い人々にとって「アジア」はアイデンティティになりにくいようだ。むしろ

ろ、彼ら・彼女らが自己認識のために欲するのは「シンガポール人は他のアジア人とはどこが違うか」「自分（個人）は他の人とはどこが違うか」という、国民または個人レベルにおける差異のほうであることがわかる。

#### 4.2. 批判、苦笑の対象としての「アジア」

「アジア」はまた、批判や苦笑の対象でもある。Asian values について学校で学んだかを尋ねると、誰もが冷めた答えを返す。「Asian values なんてもうありませんよ。（初代首相）リー・クワンユーは多分、西欧の眼差しを意識してこれを書いたんだろうけど。アジア人であることについて友達と話し合ったこともないし、自分をアジア人だと思ったこともない」（Chris）。「多分、親の世代は習ったかも。親は『アジア人ならそんなことしちゃダメ』みたいなことは時々言ってたけど、私の世代は違う」（Karen）。「Asian values 言説は、政治化された概念。私達（シンガポール）のポリシーにもっと敬意を払えと、西洋に言うためのもの」（Sunny）。シンガポール国立大学の日本研究学科の上級クラスで、「自分をアジア人だと思えますか」を含むいくつかの質問を投げかけ、自由にグループディスカッションしてもらった際も、あるグループから“Asian values”という語が、笑いとともに漏れていた。高い教育と英語力ゆえに、自らを客体化する視点を身に付けた若者たちからすれば、「アジア」は、お仕着せの国策との連想が強い、うさんくさい、無批判に受け入れることのできない概念なのだろう。

#### 4.3. 「アジア人」差別

いっぽう、シンガポール人と日本人のインタビューの語りは、部分的に類似している。英語圏欧米で他者化された体験、そして、欧米に代わる選択肢としての相手国への期待である。

シンガポール人インタビューは全員、小学校から英語で教育を受けた「英語話者」である。だが、もっとも学歴エリートと言える Chris さえ、留学先のアメリカで「人種差別があった」と明言する。白人系アメリカ人のクラスメートは、授業中はともにトランプ批判、人種差別批判などするが、授業が終われば彼に話しかけてくることはなく、「それに彼らは僕の名前を呼ばない。『Chris がこう言った』ではなく『彼はこう言った』と言う。僕はいつでも第三者。客体であって、完全なもの言う主体として扱われることはなかった」。

彼はまた「日常レベルで、自分がアジア人というラベルを貼られているのはわかってきた」し、「アジア人の間のヒエラルキー」が、白人系の人々の眼差しの中で作られていたとも言う。「白人系の人たちは、日本人とか韓国人とか東アジアからの留学生と付き合いがある。チャイニーズはその下。台湾出身であろうと中国本土出身であろうと。チャイニーズも東アジア人なんだけど。僕にとってはみんなチャイニーズ、またはただの学生なのに。（中略）でも僕自身は、自分をアジア人だと思わない。だいたいいつも自分をシンガポール人だ

と知っている」。

オーストラリアに留学した **Minna** は「自分の英語がわかってもらえなかった」と言い、「買い物をしていても、白人系オーストラリア人から、白人系のお客に対するのとは違う態度をとられた」と言う。ただし「アジア系オーストラリア人からの態度も同じ」だったそうで、その理由を「私にはオーストラリア英語の訛りが無いから」とする。この点で彼女は自分の体験を「人種」差別とは捉えていない。また「オーストラリアにいる時、アジア人のアイデンティティを持った？」と聞くと「アジア人じゃなくて、マイノリティ」と答える。このように彼女は、自分はアジア人差別をされたというよりも、言語的マイノリティ扱いをされたと解釈する。

ニュージーランドでワーキングホリデー生活を送った **Karen** は、「ニュージーランドではみんな私をアジア人として見る」ことを、ネガティブ体験として挙げる。ただし「差別されたことは？」との問いに対し、働いていたレストランで、ドイツ人は接客、自分はキッチンの裏方仕事を割りふられたことが「差別かどうかはわからない」と、慎重である。**Minna** や **Karen** と、**Chris** の、差別に関する捉え方の違いは、渡航先がオセアニアだったか、それともアジアから地理的に遠く、かつ人種差別が絶えず政治問題となるアメリカだったかの違いが関連している可能性がある。

まとめるならば、シンガポール人インタビューたちの「アジア人」としての自認が希薄なことは、欧米で暮らしても変わらない。だが欧米に行けば、いやがおうにも自分たちは他者化され、英語を母語として話していても、相手から対話を拒否されることもある。これらは初めての体験である。日本育ちの人々が「英語に苦勞する」のとは全く種類が異なるのだが、結果としては、外見や英語による他者化という、類似の体験をしている。

#### 4.4. オルタナティブとしての日本

イギリスによる植民支配、戦後の欧米からの投資という多大なインプットによって自国が高度成長を遂げてきたにもかかわらず、欧米がどこかよそよそしく、最終的に同化できる相手ではないという感覚は、シンガポールの若者たちの間に、オルタナティブなモデルへの希求を生む。ここに日本が入り込む余地がある。

大学生 **Jade** は、アメリカへの反発心と、イギリスへのアンビバレントな感情をほのめかす。日本研究を専攻する理由を「日本はおもしろい。アメリカの支配に対するオルタナティブだと思うから」と述べ、さらにいわく「シンガポールのシステムは、アメリカのシステムと対照的だと言われる。シンガポールのシステムは政府にコントロールされているとアメリカは言う。(だからといって)僕はアメリカのシステムがいいとは思わない。シンガポールの法制度はイギリス型だし」。なるほど建国以来、政治・経済・社会（言論や住環境など）が国民行動党 (PAP) 一党によって管理統制されているシンガポールは、たとえ経済的に高度発展しても、自由主義・民主主義の旗手を自負するアメリカ合衆国から見れば「アジアの独

裁国家の一つ」であり、アメリカが世界の覇権を持つ限り、シンガポールは他者化され続けるだろう<sup>18)</sup>。Jadeにはそれが不満である。そこで彼は、対抗するために旧宗主国イギリスや日本を引き合いに出している。

Jade のイギリスに対する反発心は、アメリカに対するほどではない。彼の兄はイギリスで法学を勉強中であり、彼自身もイギリスに短期留学している。しかし彼は日本のテレビドラマが好きで、日本での留学や就職を将来の視野に入れている。このように日本は、アメリカにもイギリスにも与したくないシンガポールの若者にとって、アングロサクソン至上主義への一矢となりうる。

Jade より 10 歳年長の Chris も、日本研究を始めた頃の期待を「日本はきっと、今までとは違う世界観とか、世界に対する違う見方とか、ヨーロッパ中心主義への批判を与えてくれるんじゃないかとか」と振り返る。彼の記憶では、子供時代、西洋料理は日本料理や韓国料理よりも高価であり、西洋人は階層が高く金持ちと見なされていたという。

いっぽう日本人インタビューたちの場合、英語圏欧米にあこがれ、そこで暮らし、行き詰まり、シンガポールに渡って初めて、そこが欧米に対するオルタナティブとして見える。気づきのタイミングはシンガポール人とは異なるが、いずれの側にとっても、互いの国が西洋との対比で価値を帯びうるという点で似ている。

## 5. 結論：個人的・暫時的・場所限定的な「方法としてのアジア」

以上、インタビューを通して、アジアを超えて移動するアジアの若者たちにとっての「アジア」概念の効果について比較考察してみた。本稿の主要トピックである日本人インタビューの自己観、世界観に話を戻すと、彼ら・彼女らはシンガポール人とは異なり、「アジア」というくくりを発見することによって自己観、世界観が大きく、肯定的に変化する経験をしている。また、欧米における人種的・言語的差別に気づき、シンガポール人には希薄な「アジア人」としての自認を、感慨とともに得ている。そして一部のシンガポール人が日本に期待するのと同様に、欧米へのオルタナティブとしての役割をシンガポールに見いだす。

こうしてみると、竹内の言う「自己形成の過程」ないし「方法」としてのアジアは有効なものではないか、および Chen の言うように「お互いの参照点」となることによって、アジアの人々の自己理解が変革され、再建され、アジアの脱植民地化・脱帝国主義化が進んでいるのではないか、という考えが浮かぶ。だが果たしてそうだろうか。

もし日本人インタビューたちが、「アジア人」としての連帯感に目覚め、シンガポールないし他のアジアの地域をよりよくするために今後 10 年を使いたいとか、日本と、シンガポールないしアジアの架け橋になりたいとか、アジア地域の地位を高めるために西洋に対抗する事業を始めたいとか語るのであれば、竹内や Chen が想定するような状況にあると言えるだろう。だが私の日本人インタビューたちは、シンガポールに惚れ込んだという 1 名、家族ごと移住した 1 名、現地人と結婚した人々（全員ではないが）を除いて、ほとんどが

「シンガポールは一生いる所じゃない」と言い、また今後マレーシアやタイなどの他のアジア地域に行くことは、ほとんどが「生活レベルが下がる」ので望まないと言う。いっぽうで今後、アメリカやヨーロッパで働いてみたいという人は少なくない。さらに言えば、本リサーチの日本人インタビューは、シンガポールを許容できるから残っている人々であり、好きになれなかった人は日本に帰国しているか、他国に移っているはずである。

このことはつまり、彼ら・彼女らの中に生じたアジアニズムは、きわめて個人的・暫時的・場所限定的なものであることを示している。個人的というのは、ここでいうアジアニズムが、竹内や Chen がおそらく想定するような「日本人（社会全体）」「台湾人（社会全体）」といった規模のものではなく、あくまで個人の成長物語の中でのアジアニズムだということである。私のインタビューは、自分の人生に変化を起こすために移動しているのであり、その土地の現地人の人生と関わるためではない。また暫時的というのは、その土地にいるのは、ある目的（英語圏で仕事をする等）が達成できる限りにおいてのものであり、土地そのものへの愛着のためではないということである。特に、自国民も外国人も労働力として効率的に使おうとするシンガポールは、国家全体が株式会社に例えられることが多いが<sup>19)</sup>、このことも外国人に「一生いる（勤める）所じゃない」と思わせる要因の一つと思われる。

そして三つ目に、場所限定的というのは、シンガポールがアジアの単なる一点ではなく、都市だということである。言い換えれば、日本人インタビューたちの「アジア人」としての目覚めや感激は、東京と変わらない（または東京以上の）便利さと快適さの中でなければあり得なかったということである。東京で生まれ、父親の仕事の都合で「ど田舎」に住んだことがある秀和さん(37)は「静岡のど田舎の人よりも、シンガポールの人の方が違いが少ない」「都市で、ある程度の教育を受けた人がいれば、カルチャーのレベルが同じ。合う人と、合う場所で生活すればいいだけの話」と言う。また茨城の「田舎」出身の美容師・洋太さん(31)は、「茨城から東京に出てきたことに比べれば、東京からシンガポールに出るのは大したことじゃなかった。だからシンガポールからアメリカやヨーロッパに出るのも大したことじゃない」と言う。

さらにシンガポールが、単なるアジアの一都市ではなく、東京、香港と並び称される（と同時にこれらよりも徹底した）グローバル・シティであることにも注目すべきだろう。「日本人がシンガポールで、アジアらしさと心地よさを感じるのは、日本人の幻想でしょうか。それともシンガポール人も同じものを感じているのでしょうか」との問いに対し、Chris は答える。「多分シンガポール人も感じているでしょう。でも中国に住んでいる日本人は、多分同じことは言わないんじゃないでしょうか。シンガポールは、アジアンというよりコスモポリタンですよ」。

アジア諸都市の中でも、経済発展、利便性、清潔さ、英語化、国際性、民族的多様性において抜きん出たシンガポールだからこそ、日本人一時就労者は安心してそこで出会うものを「アジア」と名付け、「アジア」に感激することができる。しかし「アジア人」としての自信



を胸に、彼ら・彼女らが次に向かいたい先は、他のアジアではなく、アメリカやヨーロッパでの個人の成長物語の続きである。いっぽう、国家が「アジア」を強調するシンガポールにおいても、個々のシンガポール人の若者はアジアニズムに<sup>はし</sup>奔ることはなく、むしろ「アジア」を欧米視線のカテゴリーとして冷やかに受け止めたり、自分の欧米での経験を解釈する際に、各自のやり方で「アジア（人）」カテゴリーを使ったり使わなかったりする。

このように21世紀という時代、アジアニズムは、アジアのそれぞれの土地に生まれたそれぞれの個人の人生の中で、カスタマイズされた形でのみ有効であると言える。だがそれは必ずしも嘆かわしいことではなかろう。個人化された「方法としてのアジア」は、脱植民地化や、対欧米的連帯といった大きなうねりは生みにくいかもかもしれないが、それは同時に国家主義にもつながりにくい。アジアの「共栄」を唱えながら、帝国主義と侵略に<sup>はし</sup>奔った国民国家がかつてあったことを思えば、あくまでも「私」が主語のアジアニズムは、そのような欲望からはもっとも遠いと言えよう。

## 註

- 1) 「方法としてのアジア」を含む竹内好の評論集『日本とアジア』は、1961年に筑摩書房より初版が出され、1966年にも『竹内好評論集第三巻 日本とアジア』が同社から出ている。本稿が使用する竹内の文章は、1993年のちくま学芸文庫（1966年の評論集の文庫版）からの引用である。同書484頁には、講演「方法としてのアジア」が実現した背景についての、竹内自身による説明がある。
- 2) 竹内好「日本人のアジア観」竹内好『日本とアジア』筑摩書房、1993年、95頁。
- 3) 竹内好、前掲書、103頁。
- 4) 竹内好「方法としてのアジア」竹内好『日本とアジア』筑摩書房、1993年、469頁。
- 5) 竹内好、前掲書、469–470頁。
- 6) ワーキングホリデーとは、二国間協定により、両国の若者（およそ18歳から30歳まで）が相手国で一定期間、就労しながら生活できる制度。日本の協定先は22か国（2018年9月現在）。アメリカ合衆国はこの制度に入っていない。オーストラリアとカナダは1980年代の協定開始以来、渡航する日本人の数において、それぞれ1、2位を占めてきた。
- 7) Asian values とは、シンガポールの初代首相リー・クワンユーが推進したとされる価値観（正確には、彼が推進したのは儒教的価値観）で、西洋の個人主義に対する家族主義などを指す。1980年代後半以降、Asian values の実体について知識層の間で論争が起こった。Asian way とは「アジアは西洋とは異なる発展の仕方をするが、平和的に共存する」という主張の総称。1990年代初頭よりリー政権が唱えたとされる。C. J. W.-L. Wee, “Asian Values, Singapore, and the Third Way: Re-Working Individualism and Collectivism,” *Sojourn: Journal of Social Issues in Southeast Asia*, 14, 1, October, (1999), 332–358; Cherian George, *Singapore: The Air-conditioned Nation*, Singapore: Landmark Books, 2000, 50などを参照。
- 8) たとえばイエズス会の宣教師マテオ・リッチが17世紀初頭に北京で出版した『坤輿万国全図』には、「亜細亜」が、「<sup>ヨーロッパ</sup>歐羅巴」、「<sup>リビア</sup>利未亜」（アフリカ）、「<sup>アメリカ</sup>亜墨利加」と並んで書き込まれている。南塚信吾、秋田茂、高澤紀恵編『新しく学ぶ西洋の歴史：アジアから考える』ミネルヴァ書

- 房、2016年、139頁。
- 9) Marc Frey and Nicola Spakowski eds., *Asianisms: Regionalist Interactions & Asian Integration*, Singapore: NUS Press, 2016, 5.
  - 10) Kuan-Hsing Chen, *Asia as Method: Toward Deimperialization*, Durham: Duke University Press, 2010, 212. これ以降、英文からの日本語訳はすべて筆者の試訳。
  - 11) Frey and Spakowski, 2016, 1.
  - 12) Ibid., 2.
  - 13) Ibid., 3–4.
  - 14) Torsten Weber, “Coming to Terms with Asianism: Historical Reconciliation and Asianist History Politics in Contemporary China and Japan,” in Frey and Spakowski eds., 204.
  - 15) 中谷文美「アジア雑貨とアジア観光」吉原和男他編『人の移動事典：日本からアジアへ・アジアから日本へ』丸善出版、2013年、364–365頁。
  - 16) Peter J. Rimmer and Howard Dick, *The City in Southeast Asia: Patterns, Processes and Policy*, Singapore: NUS Press, 66. 「グローバル・シティ」とは「経済、政治、文化などの面でグローバルな影響力を持つ都市をさす」（町村敬志「アジアのグローバル・シティー東京・香港・シンガポール」吉村和夫他編、前掲書、100–101頁。現在、アジアでは東京、香港、シンガポールがこれに該当するとされる。
  - 17) Singlish とは、シンガポールの土着化した英語のこと。中国語やマレー語の影響を受けた文法、抑揚、語彙が特徴。Hinglish も Hindi と English を合わせた造語で、インド文化圏で話される土着化した独特の英語のこと。
  - 18) アジア諸国で、西洋型民主主義が根づく前に経済発展が起こり、西洋がフラストレーションを感じているさまを、George（前掲書、5）は「西洋がアジアで人権外交を通して行おうとしてきたことは、経済という馬の前に、民主主義という荷車を置くことだった」と揶揄している。
  - 19) たとえば岩崎育夫『物語 シンガポールの歴史：エリート開発主義国家の200年』中央公論新社、2013年、140頁。